

～ 受賞のことば ～

● 贈呈式より ●

— 番組部門 —

● テレビドキュメンタリー番組 ●

本 賞 NHKスペシャル メルトダウン File.3 原子炉“冷却”の死角 NHK

NHK 鈴木 章雄（ディレクター）

受賞を大変光栄に思うと同時に、なぜこういう事故を事前に指摘できなかったのか、非常に強い後悔の念が制作陣一同ずっと続いております。3月11日以前から、原子力に対する報道に携わっていた記者、ディレクター陣がこのメルトダウンシリーズの制作に関わっているのですが、福島第一原発があれだけ津波に対して弱い、シビアアクシデントに対して弱いことを恥ずかしながら指摘できなかった。チェルノブイリ、福島に続く原発事故が二度と起きないように、あの事故で明らかになった原発の弱点、またその悲惨さを伝えながら、これからも取材を続けていきたいと思っております。まだまだ明らかになっていない事故の真相やデータがたくさんあります。我々はそれを明らかにするために、できる限りこの検証番組のシリーズを続けていきたいと思っております。



優秀賞 NHKスペシャル 黒い雨 ～活かされなかった被爆者調査～ NHK 広島放送局

NHK 広島放送局 松本 秀文（ディレクター）

NHKでは毎年8月6日に広島、長崎をテーマにNHKスペシャルを制作しています。私が広島で番組を制作している間に、広島の意味を変える大きな出来事がありました。言うまでもなく、東日本大震災と福島第一原発の事故です。それまでは広島テーマは過去の話に見られがちでしたが、原発事故の後では、不幸なことに現代のテーマになってしまいました。我々、被爆地の制作者は、常に今の時代から広島を見つめて、今の時代にどんなメッセージを発することができるのかを考えながら制作にあたっていました。最後に取材に協力していただいた被爆者のみなさん、それから執念で研究を続けていらっしゃる広島科学者のみなさんに、改めてお礼を申し上げます。



番組賞 NHKスペシャル シリーズ東日本大震災 追跡 復興予算 19兆円 NHK 仙台放送局 NHK 盛岡放送局

NHK 仙台放送局 小林 竜夫（ディレクター）

私も戸田記者も震災直後から被災地取材を続けてきたのですが、今回の番組はそうした日々の取材の中で得た被災者の方々の声や疑問をきっかけにして生まれました。本格的な復興予算が成立して半年近くになるのに一体どこに使われているのだろうか、そういう声をいろんなところで聞きました。5万ページに渡る資料をひとつひとつ検証する作業は、戸田記者が中心になって進めてくれました。検証過程の作業には本当に大変なことがあったのですが、最後まで心が折れずに作業を続けて放送までこぎつけることができたのは、被災した方々の声が我々の背中を押してくれていたからのような気がします。これからも期待を裏切らないようにしっかりした仕事をしていかなければならないと身を引き締めております。



番組賞

ETV 特集 原田正純 水俣 未来への遺産

NHK 福岡放送局 NHK 熊本放送局

NHK プラネット九州支社 吉崎 健（エグゼクティブ・ディレクター）

この番組の主人公で去年6月に亡くなられました原田正純先生、取材させていただいた水俣病の患者さんたち、作家の石牟礼道子さん、家族の関係者の皆さまに心よりお礼申し上げます。原田先生はちょうど1年前に、水俣病の問題がまだまだ残されている中で無念の思いを残して他界されました。原田先生は、現代のさまざまな不条理と戦いながら、水俣病を未来への遺産にしたいという信念を亡くなる最後の瞬間まで貫き通されました。その生き方は、今を生きる私たちにとっての励ましでもあり、そして希望でもあると思います。この賞を原田先生に捧げ、その意思を心に刻みたいと思います。



番組賞

NHK スペシャル 世界初撮影！深海の超巨大イカ

NHK

NHKエンタープライズ 岩崎 弘倫（制作統括）

私と佐々木は、4年前からプロジェクトに取り組んできました。ダイオウイカがどこに住んでいるのか、何を食べているのか全くわからない謎の存在だったので、制作スタッフは、ダイオウイカの気持ちになって探るところから始め、日が昇る前から小さな漁船に乗りこんで、深海にカメラを下ろすことを毎日毎日、愚直に繰り返しました。そういう中から少しずつわかってきて、今回小さな積み重ねが大きな成果に繋がりました。「ダイオウイカが撮れなかったら家を売るんだよな」と声をかけられない日がない、そういったふうに過ごしてきたので、こんな日を迎えられたことが夢のようです。一から積み重ねてきた苦勞が報われた思いです。



● テレビドラマ番組 ●

本 賞

リーガル・ハイ

フジテレビジョン 共同テレビジョン

フジテレビジョン 成河 広明（プロデューサー）

脚本家の古沢さん、堺さんをはじめとするキャスト陣、石川監督を中心とするスタッフみなさんのおかげで、このような賞をいただけたと思っています。受賞の連絡をいただいた時は、正直「このようなふざけたドラマが本賞をいただいているのでしょうか」と思いました。もちろん、僕らは真面目にふざけたものを作ろうと思ってこのドラマを作りました。ドラマを作っている制作陣としては、常に新しいもの、常に世界に通用するものを意識して制作しています。コメディというジャンルが放送文化の一端だと認めていただけたと嬉しく思います。本日はどうもありがとうございました。



優秀賞

テレビ60年記念ドラマ メイドインジャパン

NHK

NHK 高橋 練（制作統括）

このドラマの企画を立ち上げたのは、3年近く前になります。脚本の井上由美子さんと演出の黒崎ディレクターと3人で、「今の時代だからこそこのドラマを作りたい」、「物づくりの現場を舞台にして、なにか新しいものをつくりたい」と企画しました。電気メーカー取材して、中国にも渡ってたくさんの日本人技術者の方に取材をしました。

撮影の途中で反日デモが起き、一時はドラマが中止になるのではないかと、正直眠れない時期もありましたが、結果としてそれが、今の時代ならではのオリジナルなドラマになったと思います。脚本の井上由美子さん、音楽の龍島邦明さん、唐沢寿明さんはじめとする出演者の方々、そして一緒に頑張ってきたスタッフとこの喜びを分かち合いたいと思っています。



番組賞

最高の離婚

フジテレビジョン

フジテレビジョン 清水 一幸（プロデューサー）

この度は、名誉ある賞をいただきありがとうございます。この作品は、「連続ドラマはまだ面白い」、「面白い連続ドラマをまだまだ作ろう」という思いで、脚本の坂元裕二さん、瑛太さんをはじめとするキャストのみなさんと作り上げた作品です。賞をいただけたということは、少しは認めていただけたのかなと思っております。今後も面白い作品を生み出せるように精進していきたいと思っています。



番組賞

連続ドラマW ヒトリシズカ WOWOW

WOWOW 高嶋 知美 (プロデューサー)

この作品は、菅田哲也さん原作の作品を全六話に映像化した作品です。出演者が総勢 100 名を超える非常に大掛かりな撮影でした。ちょうど昨年の6月上旬から撮影を始めて9月上旬までの暑いなか、平山監督のもとスタッフ一同、一丸となって撮影に臨みました。そのおかげでこのような賞をいただけたと思っています。これを励みにこれからも番組作りを頑張っていこうと思います。



● テレビエンターテインメント番組 ●

本 賞

NHK スペシャル 釜石の“奇跡”いのちを守る特別授業

NHK 福田 和代 (ディレクター)

この番組は、釜石小学校の 184 人の子どもたちの証言をベースにして制作しました。制作にあたり、自分の家が流されたり、親しい人が波に飲み込まれていくところを目の前で見ていた子どもたちに、本当にあの日のことを聞いてもいいのかと深く悩みました。でも、子どもたちから、「自分たちの経験が、これから起こる災害で 1 人でも多くの人を助けるための役に立つならそれで嬉しい」と言われ、背中を押されたことを思い出しております。防災という重いテーマをアニメという形で助けてくださったアニメ制作会社の方々、そして番組にご出演頂いたタレントの皆さんに改めてお礼を申し上げます。そして今日は番組でMCを務めたアナウンサーの首藤さんも来ております。



首藤 奈知子

このような場に立たせていただき光栄です。番組のMCを務めることになり、私も釜石に行きました。そこで出会ったのは、外で遊ぶのが大好きで、でも家でゲームをするのも大好きで、お母さんに甘えていたり、ふざけすぎて叱られていたり、ごくごく普通の可愛い子どもたちでした。ただ、しっかりとした口調で、「地震が来たら津波が来るからとにかく逃げろと伝えたいんだ」と、強く話してくれました。そう教えてくれた子どもたちの思いを伝えたいと思いました。命を守るためにどうすればいいのか、今後も放送を通じて長く伝えていきたいと思っています。最後になりますが、スタジオで授業をしてくださった片田先生、MCをリードしてくださった国分太一さん、ゲストのみなさんに心から感謝申し上げます。



優秀賞

あの名曲を方言で熱唱！新春全日本なまりうたトーナメント

テレビ朝日 奥田 創史 (ゼネラルプロデューサー)

錚々たる受賞作品の中で、我々の番組だけが“どバラエティ”でちょっと浮いている感じがしないでもないですが、本当に嬉しいです。この賞は、「なまりうたトーナメント」という番組にいただいたものですが、私個人的には、我々制作者に先輩方からの「まだこれからも面白いもの作れよ、わかってんのか」というちょっと厳しめのエールだと思っています。これからもこの賞を胸に、みんなが楽しくてみんなが笑える、そんな番組を作っていきたいと思っています。



番組賞

西米良ご長寿御一行様 平成のお江戸見物ツアー

宮崎放送 坂元 伸一 (ディレクター)

宮崎県西米良村は東京の人口の 1 万分の 1、1200 人しか住んでいません。今回この東京ツアーに平均年齢 79 歳のおじいちゃんおばあちゃんが 71 人が参加しました。東京ツアーで強烈な刺激を受けて 1 年たった今も元気に暮らしています。僕らもこの番組の取材でたくさんの方の元気をいただきました。この賞を報告したところ、来週、村を挙げて受賞の御祝い会をすることになりました。西米良には“カリコボーズ”という心のきれいな人しか見ることが出来ない妖精がいます。西米良はそんな素晴らしいところです。もし宮崎に来ることがありましたら是非西米良に足を運んでください。



● ラジオ番組 ●

本賞 よみがえる話芸 節談説教

東海ラジオ放送 北 敏明（プロデューサー）

番組で紹介した小沢昭一さんは昨年亡くなられ、取材させていただいた関山和夫先生は5月に亡くなられました。そういう意味で非常に貴重な音源となりました。当社が本賞をいただくのは初めての快挙で喜ばしいことですが、一方で、ラジオにはこの節談説教に似ていると思うところがございます。ラジオの制作環境はなかなか厳しく、熟練されたディレクターやプロデューサーという人材の確保が大変苦しい現場もあります。そういう中で、このような賞をいただいたことを励みに、これからまた新しいスタッフで番組を作っていけたらなと思っております。



優秀賞 日曜スペシャル 調律師という芸術家 最高の音楽を作る究極のピアノ調律

朝日放送 鈴木 崇司（ディレクター）

この番組を作ることになったきっかけは、楽器もできず音楽の成績も悪かった私に、「ラジオなんだから音にこだわった番組を作れ」と上司に無茶振りされたことでした。調律師の仕事を説明するのに、「長3度、完全5度」「倍音」「共鳴」など専門用語が非常に多いのですが、音楽が出来ない人間が、これらの言葉を全く使わないでどう番組にするかにこだわり、苦勞して作った番組です。



番組賞 凍えた部屋～姉妹の“孤立死”が問うもの～

北海道放送 磯貝 拓（取材）

番組は、先輩・後輩一丸となって作り上げました。その中で、私は亡くなった姉妹のご遺族への取材を担当しました。そこで、ご遺族をはじめ、友人、行政の方が、それぞれに「もう少し何か出来たのではないか」という考えを持っていることを知り、「孤立」という言葉を独り歩きさせてはいけないという思いを番組に込めました。私もいろんな方々に支えられ繋がりを持つ中で、取材活動をし、日々生きていることを忘れずに、これからも精進したいと思います。



● 個別分野 ●

演技賞 瑛太 「最高の離婚」

この度は、素敵な賞をありがとうございます。僕が演じた光生（みつお）という役は、神経質で理屈っぽく、生活のなかで膨大な言葉を吐き続けるという役柄だったのですが、撮影の中盤ぐらいから体調の不調が現れて…、整体師の方に診てもらったら、手や肩や腕の緊張感がありすぎる、骨盤と背骨が歪みきつていと言われ、「あなたは、今なにをやっているんだ？」と聞かれたので、「光生をやっています」と言ったところ、“ぼかん”とされました。撮影時を振り返りそんなことを思い出しました。

今回の受賞は、素晴らしい作品を作り出された脚本家の坂元裕二さん、そしてプロデューサー、スタッフのみなさん、たくさんの刺激を与えてくれた共演者のみなさんのお力があっての受賞だと思います。ありがとうございました。



演技賞 尾野 真千子 「最高の離婚」

今日は撮影中のため贈呈式の会場に行くことができませんが、本当はとても行きたかったです。演技賞をいただけるのは、なかなかのことなので本当にありがたく思っています。ありがとうございます。これからも自分らしく、いろいろな役を演じ、みなさまのお力を借りてお芝居を続けていきたいと思っていますので、これからもよろしくお願いいたします。これからも頑張ります。(ビデオレターより)



脚本賞 古沢 良太 「リーガル・ハイ」

現代の日本にメッセージを込めた社会派のドラマであると間違った評価を一部でされているようですが、僕たちはみんなで、ふざけて楽しんで作りました。監督はじめスタッフや出演者のみなさんも面白いものを作ろう、そういう前のめりな気持ちで作ってくれたので、そういうものがドラマのワクワクする楽しさとして、みなさんに評価していただいたならばすごく嬉しいです。脚本賞に関しては、毎クール、大勢の尊敬する先輩や優秀な同業者の作家たちがしのぎを削って、腹の中で嫉妬したり負けるものかと思っ書いていると思うので、そういった中でこういう立派な賞をいただけて励みになります。ありがとうございます。



制作賞 秋田 和典 「よみがえる話芸 節談説教」

これは、講談や落語などの話芸の原点が「節談説教」にあることをテーマにした番組です。制作にあたり、小沢昭一さん、話芸研究家の関山和夫さんの業績に大いに助けられました。改めて御礼申し上げます。小沢昭一さんが「最高にして最後の説教使」と呼んだ祖父江省念さんの資料が、名古屋の有隣寺に遺されていたということが番組作りのきっかけでした。祖父江省念さんのお孫さんで説教使としても活躍している祖父江佳乃さんをご紹介します。節談説教について少しお話いただきます。

祖父江 佳乃

説教使には、「一声、二節、三おとこ」という条件がございます。一番目に声の良いこと、二番目に節回し、言葉の抑揚、そして三番目の“おとこ”というのは、立ち居振る舞い、荘厳、作法のことでございます。この三つを兼ね備えたのが、私の祖父、祖父江省念でございました。祖父が亡くなって、「説教使」という言葉も消えておりましたが、その跡を継がせていただきました。説教使の“使”というのは、御師匠様の“師”とは書きません。あくまでも、阿弥陀様、仏様の使いという字を書きます。声なき声を追いかけて、姿なき姿を追いかける、それが私の役目でございます。その中で、この賞をいただいたことは、「お前のやっていることは間違っていなかったんだよ」と亡き祖父から背中を押していただいたような感じがしていることでございます。これからも言葉の力、その力をきちんと伝えること、そして言葉をこぼすその責任を持てますますの精進でございます。ありがとうございます。



特別賞 原田 正純 「ETV 特集 原田正純 水俣 未来への遺産」

萬野 利恵

本日は、亡き父、原田正純にこのような立派な賞を賜りまして、誠にありがとうございます。この賞は、吉崎さんはじめNHK 熊本放送局、NHK 福岡放送局のみなさんのご尽力と、献身的な取材の結果だと思っています。

父は、国立大学におりながら国と対峙するという状況でしたので、学内や学会内で厳しい局面に立たされたこともあったと思います。熊大医学部では、ただの一度も講義をするチャンスがありませんでした。でもそのような中、報道関係の方が水俣問題に注目をしてくださって、父を取り上げてくださったおかげで、父は心が折れることなく、励みになっていたのだと思っています。

父もそうでしたが、吉崎さんは最後まで取材対象者の方に寄り添って、実直に真摯に対応してくださりました。父の最後のインタビューは死の6日くらい前で、ある意味、命がけでインタビューに臨みました。吉崎さんも水俣病に出会ってしまったが故に、命を削って取材をされている部分があると思います。引き続き今後のご活躍をお祈りいたしまして受賞のご挨拶にかえさせていただきたいと思います。



NHK 「宇宙の渚」制作グループ

NHK 田附 英樹（制作統括）

この番組は、NHKの技術者がとても小さな超高感度ハイビジョンカメラを開発したことから始まりました。出来立てホヤホヤのカメラを宇宙に持って行き、果たして何が映るのか。正直言って何の勝算もなく、制作期間中、“何も映らずに番組が大コケする夢”を何度も見ました。放送した心洗われるような宇宙の映像の舞台裏は、実際、心もズタズタになるような綱渡りの連続でした。そんな中、スタッフの一人一人が、見たことのないものを見てみたいという好奇心を持ち、ものすごく頑張ったことがこの結果につながったのだと思います。これからも、テレビの可能性を広げるような「無茶な挑戦」を続けていきたいです。



NHK 東日本大震災証言プロジェクト

NHK 宮本 聖二（知財展開センター）

このプロジェクトの目的は、震災を体験した方々の言葉を記録し、それを人々と共有することです。被災地となったNHKの放送局を中心に、「あの日わたしは」「証言記録 東日本大震災」を制作、放送しました。さらに、ウェブサイト「東日本大震災アーカイブス」では、証言動画を公開し、防災の講演会やワークショップでも活用されています。今後も、放送、ネット、出版、イベントを通してこの証言を次につないでいく取り組みを続けていきたいです。最後に、つらく過酷な体験を証言して下さいました皆さんに御礼申し上げます。



位相調光制御対応LED駆動装置開発グループ

日本テレビ放送網 小寺 勝馬

昨今の放送技術の世界では、デジタルの技術が一般的になっていますが、今回の開発においては、LEDの装置の中にふんだんにアナログの技術を使っています。これからもデジタルという技術の中でアナログの技術は生き続けるのだと思っています。引き続き精進して参ります。今回の開発にかかわってくださった関係者のみなさまにもこの場を借りて御礼申し上げます。



SDカードスクランブラー開発グループ

フジテレビジョン 西川 寛

今回の開発は、技術部門と報道部門がそれぞれの持つ知識とアイデアを寄せ合って実現させました。例えばこのケース、金型から起こすと高く予算内に収まらず、悩んでいたところ、報道局のメンバーが、「削っちゃえばいいんじゃないの」と発言。これが『目から鱗』で、樹脂の塊からケースを削り出すという工法にたどり着きました。フレキシブルケーブルの耐久性を試すため、1000回に及ぶ折り曲げテストを行い、ケーブルより先に私の爪が剥がれてしまうという、正に血の滲む努力を積み重ねて完成させました。これからも放送の現場に携わるみなさんが必要とするものを形にしていきたいと思います。



ツインズカム開発グループ

NHK 沢田 智

まず、こんなカメラを作りたいという私の無謀な提案を受け入れてくれた上司に感謝します。その1年後、なんとか映像が出せるようになり、オリンピックの関係者に見せたところ、是非これを使いたいと言われた時は本当に嬉しかったです。オリンピック本番まで様々な苦労がありましたが、NHKの技術研究所からのアドバイス、積極的に番組に使ってくれた演出陣、アナウンスコメントの「NHKの開発したカメラで撮影しております」というさりげないPRなど、NHKみんなの力で作り上げてオリンピックまで持って行くことができたと思います。これをゴールとせず、チャレンジしていきたいと思います。

